〔書評〕特攻からの帰郷と解放

―権学俊『朝鮮人特攻隊員の表象　歴史と記憶のはざまで』―

趙　相宇

一　彷徨う朝鮮人特攻隊員

植民地時代における朝鮮人の動員被害にどのように向き合うべきか。この問題は、日韓の歴史問題において最も重要なテーマであり、近年では外交問題にまで発展している。

もちろん、日韓関係が常に歴史問題に彩られてきたわけではない。日韓の歴史問題は、主に一九九〇年代以降に本格化した。冷戦の崩壊と日本の東アジアにおける地位の低下、日本社会における歴史修正主義の流行、韓国の民主化と過去清算、朝鮮民族の英雄への着目から一般民衆の動員被害への着目といった変化が主な背景として目される。

一方、一九九〇年代は、単に日韓両国の自国中心主義的なナショナリズムの発露の時代とも言い切れない。日韓の歴史問題がこの時代に盛り上がりを見せるのは、日本政府の植民地支配の責任に対する是認、韓国社会における脱民族主義の流れをもその背景としている。日韓両国ともに民族の「恥部」と見なしてきた「慰安婦」が普遍的な人権の問題として浮上したのは、民族主義の発露より、グローバル化を意識してそれまでの民族主義の偏狭さから離脱しようとする動きともつながっている。

しかし、こうした脱民族主義の流れの中でも依然として居場所が見つからないまま彷徨い続け、戦争の「美

化」に動員され続ける存在がいる。一九四四年から四五年の敗戦まで無謀な自爆作戦を命じられ、異郷の地で散って行った朝鮮人特攻隊員である。

「特攻」に関する日本人側の史料は数多く残っているが、朝鮮人特攻隊員については一次史料に限界があり、いまだに謎が多い。本書は、朝鮮人特攻隊員の実態や内面を戦時・戦中・戦後の彼らを取り巻く社会構造や政策、関連の証言集やメディア表象から紐解き、日韓両国が彼らをいかにナショナリズムの中で忘却し、占有してきたのかを明らかにする。

朝鮮人特攻隊員は、どのように死に、どのように忘れ去られ、どのようにその呪縛から解放を迎えられずにいるのか。彼らの魂をナショナリズムの呪縛から解放するためにはどのような視点が要求されるのか。本書はそうした観点から朝鮮人特攻隊員をめぐる日韓両国の表象の問題とナショナリズムの責任を問いかけている。

二　「志願」と「天皇崇拝」の内実

朝鮮人特攻隊員に関する表象は、日韓両国ともに二〇〇〇年代以降に盛り上がりを見せる。しかし、その表象の在り方は、朝鮮人であるにも関わらず天皇のため、または日本のために死んでいった「模範的な日本人」や、朝鮮民族の名誉のために死んでいった「立派」または「哀れ」な人々といった枠から大きく外れることはない。

著者は、こうした表象の在り方が日本ではしばしば戦争の「美化」につながり、韓国では典型的な「親日派」言説として再生産され、朝鮮人特攻隊員の内実や苦悩、それを取り巻く植民地支配の暴力や責任が看過されがちであると指摘する。

確かに、朝鮮人特攻隊員は、表面上は「志願」によって飛行機乗りになり、特攻にも「志願」したとされる。韓国で彼らが天皇のために命を捨てた「親日派」と見なされるのは、こうした背景がある。しかし、そのような認識は果たして特攻隊員の実像を物語ってい

るのだろうか。

朝鮮人特攻隊員は、一九三七年に本格化した皇民化教育を受けた世代であり、様々な朝鮮総督府の宣伝によって日本が戦争に勝っていることを疑うのが難しい環境にあった。また、戦争の激化に重なった旱魃といった自然災害は、農民人口が多かった朝鮮人の生活を追い込み、困窮から脱するために軍へ志願する者が多かった。朝鮮総督府の機関紙となっていた『毎日申報』（のちに『毎日新報』）は、志願制度の良さや詳細な内容をそうした朝鮮人の状況に付け入るようにわかりやすく解説し、応募を競わすかのようにその殺到ぶりを報じた。

朝鮮人が軍の飛行機乗りに「志願」する背景は、こうした生活上の問題のみならず、飛行機に対する憧れも大きかった。第一次世界大戦によって飛行機は近代科学の結晶とみなされ、朝鮮民族の独立を図る立場からも日本の支配に従順な者たちの立場からもそれぞれの理由で憧れの対象となった。朝鮮総督府は模型飛行機の製作を教育に導入し、総督府の機関紙における戦争遂行に関わる広告には飛行機が多く登場した。植民地支配の初期からその末期に至るまで飛行機は朝鮮人の憧れの対象となり、皇民化の象徴的なシンボルとして用いられ、戦争の深化とともに彼らの日常に染込んでいったのである。

生活の困窮からの脱出、飛行機への憧れを背景に飛行機乗りになった朝鮮人たちは、太平洋戦争の末期、特攻隊員となったが、その思いは様々で「天皇崇拝者」に収斂されるものではなかった。朝鮮人の独立への希望、朝鮮人差別の是正、家族の安寧。だが、彼らの多種多様な思いは、彼らの「戦果＝戦死」を称え、家族もろとも「模範的な日本人」として取り上げられる中で黙認され、軍の検閲を受けた遺書や手紙が彼らの本音であるかのように新聞紙上に掲載された。さらに、特攻への「志願」というのも、軍の上官からの命令の中で行われており、それに背くことは難しかったと著者は指摘する。

三　再び動員される「軍神」

「志願」という名目で動員された朝鮮人特攻隊員は、死後に「軍神」「神鷲」と表象され、生前からも彼らは多くの朝鮮人の後輩たちの英雄として描かれた。一九四〇年以降から祝われた朝鮮総督府の「航空記念日」には彼らの郷土訪問飛行が行われ、後輩たちに軍への志願を促すこともあった。「日本精神」を体現する存在として表象された朝鮮人特攻隊員は、戦後にも日本社会においてその崇高さを称えられ、「英霊」として祀られる。ただし、彼らの存在が戦後の日韓社会において一般的に再び認識されるようになるのは、一九八〇年代以降であった。

戦後のＧＨＱの占領下において特攻への慰霊は制限され、「軍神」だった彼らは石を投げられる負の遺産となった。だが、サンフランシスコ講和条約が結ばれると、旧軍人や将校などを中心に特攻隊員を慰霊する動きが本格化し、多くの特攻隊員が出撃した知覧はその中心的な地域となった。「もはや戦後ではない」というスローガンの中で、特攻隊員を素材とする「戦記もの」や映画が相次いだ。だが、戦後に差別的な外国人登録に関連する諸制度によって朝鮮人は「外国人」となり、朝鮮人特攻隊員の記憶も薄れていった。

一方、元軍人や将校たちは、朝鮮人特攻隊員の遺族を探し回り、遺品を渡し、慰霊することに努め、それを彼ら自身の戦後の一区切りとして考えた。「特攻の母」と呼ばれる鳥濱トメもその一人であり、彼女が知覧で営んでいた富屋食堂によく通っていた卓庚鉉（日本名：光山文博）の遺族を戦後初期から探し回った。その甲斐あって、一九八四年に知覧特攻隊員戦没者慰霊への韓国人遺族の参加が決まり、その様子は南日本放送局から『一一人の墓標』という題目で放映された。このドキュメンタリーは、日本民間放送連盟賞を受賞するなど、日本社会に朝鮮人特攻隊員の存在を知らしめる契機となった。同番組は、韓国の放送局にも影響を与え、これを参考にした朝鮮人特攻隊員に関するド

キュメンタリーが韓国でも一九九〇年代半ば以降に放映された。

一九五五年から毎年行われてきた知覧特攻隊員戦没者慰霊祭は、一九八四年の韓国人の遺族の訪問によってその正当性を強め、「国際交流」と「平和」を祈るイベントとしての地位を固めた。トメや特操会ＯＢ、マスコミはこれらを戦後の一区切りとして位置づけ、責務からの解放感を味わった。

著者は、この態度こそ、植民地支配や侵略戦争への反省の欠如と責任の棚上げの姿勢を表していると指摘する。八四年以降、朝鮮人特攻隊員の慰霊碑を建立する計画が鹿児島県特操会を中心に浮上するが、特攻を空しい死として捉える韓国の遺族と意見が合わずに頓挫した。また、一九九五年にも沖縄の「平和の礎」を参考に名前だけを入れる慰霊碑を構想したが、何で彼らが特攻で死んだのか、その罪が問えないとする韓国の遺族と葛藤し中止となった。しかし、トメと卓庚鉉の物語が全国的に有名になり、卓が出撃前に「アリラン」を歌った逸話が朝鮮人特攻隊員の代表的な逸話として定着したこともあって、一九九九年には知覧特攻平和会館の敷地内に「アリランの鎮魂歌碑」が勝手に建立された。

トメと卓の人間的な交流と親交が感動的な物語として日本全国で本格的に消費されるようになったのは、二〇〇〇年代以降であり、二〇〇一年に日本公開された映画『ホタル』の影響が大きかった。これにより卓は朝鮮人特攻隊員の代表的な言説・表象となり、「ありがたい朝鮮人」として表象された。

佐藤忠男は、この映画が特攻を犬死か英雄的な犠牲かの二者択一から抜け出したものとして評価したが、著者は韓国で同映画が軍国主義の美化として批判されたことに触れながら、朝鮮人特攻隊員に対する歴史的な責任が欠如していると指摘する。

同映画では、日本人の夫妻が朝鮮人特攻隊員の遺族を探し回り、遺品を渡そうとするが断られる。だが、金山（卓庚鉉をモデルにした登場人物）は朝鮮民族と

恋人のために死んだと遺族に伝えると、彼らは遺品を受け取り過去と和解する。確かに朝鮮人の特攻隊員の中には、そのような思いを抱いて死んでいったとみられる人々が存在した。だが、彼らの植民地支配下での苦悩やその歴史性の詳細を省略し、日本人夫妻の善行によって彼らの死を安易に「朝鮮民族の名誉」として堂々と位置付けるのは、戦後の韓国社会において特攻隊員の遺族が受けた「迷惑」にあまりにも無頓着すぎる所作である。

韓国社会では、植民地解放後、「反日」「反共」イデオロギーの強調の中で、戦前に朝鮮人の憧れであった朝鮮人特攻隊員は断罪すべき「親日派」となった。遺族は賞賛される存在から家族の死を悼むこともままならない状況に追い込まれたのであり、もはや名誉などどこにもない。何で朝鮮人特攻隊員は死んだのか、という歴史的な省察なしに、朝鮮民族のために死んだと言われるだけで簡単にその死を受け止めることはできないのである。

また、このような安易は朝鮮人特攻隊員の表象は、彼らを再び日本国家のために死んだ「英霊」として動員することにつながる。トメと卓の物語は、『ホタル』以降、盛んに再生産されるようになり、トメの孫である鳥濱明久を中心に立ち上がった「知覧特攻の母鳥濱トメ顕彰会」の理事長柿崎裕治が二〇〇八年から手掛けている『帰って来た蛍』もその一つである。そして、この物語では、特攻作戦の悲惨さや不条理を問いただすより、国を守るために命を惜しまずに戦った特攻隊員を賞賛している。

こうした特攻の表象は、一九八〇年代以降の歴史認識問題や、九〇年代の歴史修正主義の本格化ともつながっており、こうした流れが二〇〇〇年代の「特攻ブーム」の大衆的な基盤を支えている。漫画家の小林よしのりや、小泉純一郎元首相、安部晋三元首相などの右派の政治家は特攻を「至純」といった美しいものとして表象し、その認識はネット空間における特攻語りの源流にもなっている。右翼団体の「日本をまもる会」

は、村山談話への反発として「大東亜聖戦大碑」を二〇〇〇年八月に建立し、朝鮮人特攻隊員の名前を無断で刻銘した。

むろん、日本における特攻隊員の表象がすべてその死をただ賛美するものばかりではない。鳥濱明久が運営する「ホタル館」は、特攻隊員を「軍神」として英雄視する知覧特攻平和会館とは異なり、トメと特攻隊員の人間的な交流に主眼を置いている。鳥濱明久は知覧特攻平和会館の一面的な展示を批判することもあった。だが、「ホタル館」を訪れた者の感想の多くは、日本の平和の尊さ、彼らの犠牲の上に今の日本があるというもので、いずれも、植民地支配の暴力や国家暴力には触れられていない。

戦後、日本の戦争犯罪を裁くために開かれた東京裁判は、西洋社会中心であり、アジアの植民地支配については、彼ら自身も植民地を有していることもあって徹底的に追及されなかった。また、冷戦構造の中で、アメリカと日本の保守勢力は手を取り合い、彼らの罪は赦免され、一部の軍人の暴走に歴史の責任が押し付けられた。植民地支配への責任を棚上げにした日本の戦後の姿勢は、ここから始まっており、特攻の表象の底流を成していると著者は指摘する。

四　「断罪」の対象としての特攻隊員

一方、著者は、韓国社会のナショナリズムについても、一定の理解を示しつつも、厳しく批判する。

先ほども触れたように、韓国社会では「反日」イデオロギーの中で朝鮮人特攻隊員の存在は長い間忘却されてきた。植民地時代の記憶は、三・一抗日独立運動や、八・一五光復節のように、「抵抗」の面が強調され、朝鮮人特攻隊員のような存在は「親日派」として糾弾されてきた。一九八〇年代に卓庚鉉の遺族が知覧の慰霊祭に出席した際の報道で再び朝鮮人特攻隊員の存在が韓国社会で浮上したが、再び関連の報道は消え、彼らが本格的に韓国社会において扱われるようになるのは二〇〇〇年代からである。

韓国の民主化により、一九九〇年代からそれまで軍事政権のもとで抑圧されてきた種々の被害に関する調査が始まり、植民地支配に関する歴史の究明、特に親日派に関する調査もその一環として行われた。この中で特攻に関する関心も徐々に高まり、メディアのみでなく、韓国の歴史学界も彼らの存在に注目するようになる。朝鮮人特攻隊員は、従来のように糾弾されるだけではなく、被害者としても明確に認識されるようになり、生前に将校の位になかった特攻隊員は強制動員被害者として認められるようにもなった。現在、韓国政府は、朝鮮人特攻隊員をどう評価しているのかについて公式の見解を出していないが、少なくとも特攻隊員というだけで「親日派」とみなしてはいない。

ただ、韓国社会において、特攻隊員が完全に受け入れられているかと言われれば、そうではない。映画『ホタル』における朝鮮人特攻隊員金山のモデルとなった卓庚鉉の慰霊碑を彼の故郷に建てようとする動きが韓国通で知られる女優・黒田福美によって試みられたが、地元の泗川市の反発に遭って頓挫した。

黒田がイメージしたのは、敵味方関係なく犠牲者の名前を刻む沖縄の「平和の礎」だったが、卓が自ら志願して天皇のために死んだこと、靖国に合祀されていること、日本政府の歴史認識や歴史歪曲などが主な理由で韓国社会の反感を買い、予定していた帰郷祈念碑の除幕式は中止となった。

帰郷祈念碑の除幕式に合わせたツアーも組まれたが、結局、観光客の除幕式への参加は叶わず、同碑は解体されて二〇〇九年に京畿道龍仁市にある法輪寺に移された。法輪寺が批判を受けないように、黒田は卓の名前を碑から削除したが、二〇一二年にＫＢＳで『朝鮮人神風　卓庚鉉のアリラン』が放映されると、法輪寺の碑の存在が再び耳目を引き、光復会をはじめとする民族団体からの抗議を受けた。現在では、半分が地中に埋められた帰郷祈念碑の前で、毎年の陰暦九月九日に、特攻作戦で戦死した朝鮮人たちの慰霊祭を行っており、黒田をはじめとする日本人も参加するという。

このような一連の出来事に対し、著者は黒田のインタビューなどを手掛かりに彼女には歴史に対する省察があまり見られず、碑が建ったことで日本社会の加害責任の回避につながるのは断固拒否すべきとしつつも、韓国社会の歴史認識についても不十分であると批判する。この一連の出来事は、朝鮮人特攻隊員について真剣に議論する絶好のチャンスであったのにも関わらず、地方紙は特攻隊員の親日性などに着目し、一部の全国紙は卓を犠牲者としてみなすのみであった。彼らがいかにして特攻隊員になり、死を迎えたのか。その歴史的な意味は何か。慰霊碑の存在が韓国社会にいかなる影響を及ぼすのかといった核心的な問題は扱われなかったというのである。

また、著者は、生き延びて戦後に韓国に帰ってきた特攻隊員や軍関係者と、死んでしまった隊員に対する評価があまりにも異なると指摘する。例えば、特攻隊から帰ってきた朝鮮人は、韓国空軍の設立に大きく貢献し、その後に要職に就いた。満州地域における抗日独立運動軍を討伐していた朝鮮人のみで構成された間島隊出身の白善燁は、韓国軍の陸軍の設立者となり、今も韓国の保守派から尊敬されている。軍事政権を率い、今も高い人気を誇る朴正熙元大統領は、満州国軍将校出身であり、彼が執権していた時代に韓国社会の植民地記憶を記念する博物館やモニュメントの大半が建立された。彼らは、冷戦構造を利用し、「反共」を掲げながら抗日独立運動家出身の共産主義者を敵とし、一方では、植民地支配に対する「抵抗」の記憶を国家に占有させることで自らを民族主義者として転身させた。皮肉にも、戦死した朝鮮人特攻隊員の居場所を失わせ、「断罪」してきた韓国社会のナショナリズムは、生き延びた「親日派」によって支えられたものであったのである。

五　朝鮮人特攻隊員の特攻からの解放

これまでまとめてきたように、本書は、朝鮮人特攻隊員の表象をめぐる日韓社会のナショナリズムの責任

を問いかける姿勢を明確にしている。

日本社会の戦後の「平和」を掲げたナショナリズムは、特攻隊員の死を安易に「献身的な犠牲」や「名誉」に回収させ、戦争そのものの加害性や、植民地支配の責任を曖昧にし、遺族の悲しみは感謝に転換された。韓国社会の「抗日」の神話化に根差すナショナリズムは、植民地支配下における民衆の葛藤や苦悩をその正統性の周縁に追いやり、過程はどうであれ日本帝国に利するのであれば「民族の裏切り者」とする態度を社会に定着させてきた。しかも、その作業は、生き残った「親日派」の転身過程の中で徹底的に遂行され、特攻隊員の居場所はかつての戦友により奪われた。

両国のナショナリズムに根差す朝鮮人特攻隊員の表象の在り方は、いずれにしても死んでしまった者を墓から掘り起こし、再びそれぞれのナショナリズムのために彼らに出撃することを命じることに等しい。生きた者たちの責任はその中で不当に解消され、死者の表象に隠れて彼らだけの安息の地を作るのである。日韓の彼らの慰霊をめぐる葛藤は、朝鮮人特攻隊員を再び戦地へと呼び戻す構図になってしまっており、名誉ある朝鮮人にも日本人にもなれない彼らの「宙づり」状態は一層深まり、戻ることのできない空虚をただ旋回している状況と言えよう。

では、どうすれば彼らの居場所を作りつつも植民地支配や日韓両国のナショナリズムの責任を回避せず、朝鮮人特攻隊員の長い飛行と動員を終わらせることができるのだろうか。

まず、著者が提案するように、それぞれの歴史を東アジアにおける有機的な関連の中で相対化し、一国中心的な史観から抜け出すことが有効であろう。「抵抗」か「協力」か、そのどちらかに植民地時代の内実を振り分けようとしたナショナリズムの単純さ克服し、その複合的で重層的な姿を受け止めるには、歴史そのものの地盤を「国史」から「東アジア史」に広げる必要がある。そうすることで、ようやく、日本社会はこの問題が「朝鮮人の名誉」として安易に片付けられない

ことに気づくであろうし、戦後にも続いている自らの責任について自覚することが可能になるであろう。また、韓国社会は、朝鮮人特攻隊員を民族の裏切り者か否かという一国中心的な評価を相対化し、自らの民族主義を省察する契機を得るはずである。

日韓両国の表象を横断する本書の意義は、多種多様なメディア表象とその背景を整理し、朝鮮人特攻隊員の「宙づり」状態がいかなるものかを明確にしたところにある。もちろん、著者も認めているように、朝鮮人特攻隊員の内面についてはその一次史料が不足しているため、まだ研究の余地がある。ただ、歴史は必ずしも本人たちの証言のみで片付くものではなく、これが集合的記憶の問題である以上は、我々が彼らをどのように占有しようとしたのかが現在の社会を考える上では重要である。歴史の相対化は、その歴史を方向付ける現在の私たちの記憶の相対化から始めなければならない。それができてはじめて、ようやく価値づけの難しい朝鮮人特攻隊員の歴史の空白を埋める準備が整うと言えよう。

一方、本書で朝鮮人特攻隊員の表象に関する問題がすべてクリアになったわけではない。例えば、鳥濱トメと特攻アリランの表象は、世代が変わるにつれ、何が抜けて、何が強調されていったのか。鳥濱トメが朝鮮人特攻隊員の表象を広める上で重要な役割を果たしたことは本書で明確に浮かび上がるが、その世代間の変遷についてはまだ検討の余地があり、日本社会の姿勢をより詳細に吟味する上で重要な課題と思われる。トメの意志の継承が日本社会でどのように行われ、その変遷が朝鮮人特攻隊員の表象にどのような影響を与えたのか、その行間をもう少し読み込んでみたい。

また、著者は近年の韓国社会における朝鮮人特攻隊員への内面の着目を評価しているが、この点についても時系列的な変化が気になった。すなわち、韓国社会はどの隊員をどのような理由で注目し、そのような注目から抜け落ちている隊員は誰で、それはなぜなのか。そうした状況が、韓国社会におけるナショナリズムを

めぐる変化とどのように連動し、また、どのように断絶しているのか。この問いは、韓国ナショナリズムが朝鮮人特攻隊員の表象をどのように占有しようとし、その表象がそこからどのように逸脱するのかと関連しており、近年の朝鮮人特攻隊員の内面に着目する表象の意義をより明確に捉えるためにも重要な作業である。

もちろん、これらの課題は、本書がこれまで試みられなかった朝鮮人特攻隊員の日韓両国における表象の問題を横断的かつ包括的にまとめ上げたからこそ見えてくるものである。歴史の空白を埋め、自らのナショナリズムの責任を省察する契機を表象と記憶の観点から本書は見事に提示してくれている。日韓両国の表象およびナショナリズムの時系列的な変化の詳細や、台湾人の犠牲者も含めた空間軸の拡張へとつなげる作業の骨組みとなる貴重な成果であり、朝鮮人特攻隊員を真に動員から解放するための第一歩となる作品と言えよう。